

『モントリオル』における医師の役割

大橋 絵理

長崎大学言語教育研究センター

Roles of Doctors in Maupassant's *Mont-Oriol*

Eri Ohashi

Center for Language Studies, Nagasaki University

Abstract

This paper analyzes the roles of doctors in Maupassant's novel *Mont-Oriol*. In 19th century France, natural hot springs and the practice of medicine were inextricably linked. During this unique period, as described in Maupassant's *Mont-Oriol*, many doctors in France treated their patients in spas and natural hot springs. In Part One, the doctors in this context were dedicated to their patient's health initially; however they ultimately became more interested in material pursuits. In Part Two, the roles of doctors appeared to change somewhat. While doctors, in general, still seemed to place a great emphasis on making money, two of the main characters who were doctors, began to develop their religious faiths and pursue love interests. At this stage, the drama which involves the doctors' lives becomes somewhat of a parody. The doctors behave very hypocritically and have little regard for their patients. Through Maupassant's humorous descriptions, readers of *Mont-Oriol* can gain a satirical look at what life may have been like for doctors in 19th century France.

Key Words: *Mont-Oriol*, Maupassant, spa, doctor, 19th century

1. はじめに

モーパッサンの作品は小・中編が多く、長編は 1883 年に書かれた『女の一生』をはじめとして、死の 3 年前の 1890 年に書かれた最後の『我らの心』を含めて 6 編し

かない。その中で『モントリオール』¹は『ベラミ』に次ぐ3番目の長編であり、19世紀に飛躍的に発展をとげた温泉保養地が舞台となっている。モーパッサンにとって温泉保養地は馴染みの場所であり、彼は療養のため1883年8月初旬、1885年の8月、1886年の7月から9月にかけてオーベルニュ地方のシャテルギュイヨンに滞在していた²。当時シャテルギュイヨンには、温泉開発の例にもれずホテルや別荘が建設され、裕福な商人や貴族も訪れ、その独特の雰囲気はモーパッサンの想像力を非常に刺激したと考えられる。実際、彼は1885年の8月17日付けの書簡で「僕はオーヴェルヌ地方の感嘆すべき遠足をして帰ってきたところです。ここはすばらしい、特別な印象を与える地方です。ぼくは小説にそのことを書いてみようと思っています」³と語り、1886年にシャテルギュイヨンを再訪後、1887年に『モントリオール』を出版したのである⁴。

ところで、アドルフ・ジョアーヌが監修した『ヨーロッパの温泉』の中で各地の鉱泉を使用した治療法が詳細に記載されているのを見てもわかるように⁵、当時の温泉開発には、医師の存在が大きな役割を果たしていた⁶。モーパッサン自身も、病気の悪化によって1887年11月4日にアルジェリアのリザのハマムに滞在するなど、次々と温泉療養地の医者にかかった。彼は1884年の5月11日の『ジル・ブラス』に発表した『病気と医者』⁷という短編の中で、「オーヴェルニュ地方は病人の土地で」⁸あり、「医者の数だけ病気がある。患者はなんでも信じるのだ」⁹と語り、実際『モントリオール』の中にも数多くの医者を登場させている。本稿では、現在まであまり重視されていなかった『モントリオール』における医者の役割について考察したい。

2. 医師達の多様性

フランスでは16世紀に王の首席待医であるラ・リヴィエールが「各州に温泉監督官（医師）を任命し、自分の任務である監視や調査、活動のコントロールなどを補助させた。[...] 温泉監督官は源泉を発見し、特性を検査し、それらを保護し、温泉施設の良い働きを監視するという役目を負っていたので、その任務は重要であった」¹⁰。その後国王が17世紀に「温泉問題担当」、18世紀に「王立医学委員会」という温泉に関する行政機関を特別に設置したことからもわかるように、温泉は国による統治がなされ、温泉療養は貴族の間で病気の治療法として認知されていた¹¹。また、19世紀には、1860年に鉱水の衛生状態を管理するために「利用されている源泉の位置するあらゆる場所は、十分な監視と施設の活用具合に責任を負う監督医によって監視されなくてはならない」¹²ことになった。さらに医療技術の進歩にともなって医学的側面が強調されるようになり、温泉保養地では個人シャワー室や治療室の充実が促進されただけでなく、新鮮な空気の中での散歩も医療行為と考えられ遊歩道も整備された。パリから遠く離れた土地への移動が鉄道の発達によって容易になり、医師達がガイド

ブックや新聞で推薦したことも温泉療養の流行の一要因となった。

モーパッサンは架空の温泉地モントリオルのモデルとなるシャテルギュイヨンで、アレクシス・バラドック博士の療養所に滞在していた¹³。彼は 1885 年にシャテルギュイヨンでの経験をもとに執筆した中編『僕の 25 日間』¹⁴の中で、「僕は風呂に入りそしてシャワーをあびた。鉱水を 3 杯飲み、水を飲むたびに公園の遊歩道を 15 分歩いた。そして最後に飲んだ後は 30 分以上歩いた」¹⁵と綴っている。このような治療法は、当時の温泉地では一般的なものであり、同様の行動を日課とする治療客の姿が『モントリオル』にも描写されている。またモーパッサンは次のようにも書簡で母親に語っている。「ここには沢山の人がいる。ポタン医師がこの温泉地を監督しているからだ。でも、皆すごく退屈しているので、泉質がいいにもかかわらず、大部分のご婦人たちは二度と来ないだろう」¹⁶。この書簡からモーパッサンは治療だけでは温泉地は発展しないと考えていたことがわかる。

上記のような状況で執筆された『モントリオル』は、モントリオルという温泉保養地での女主人公の人妻クリスティアーヌと兄の友人ポールとの恋愛、妊娠、出産、それと同時に進行する彼女の夫アンデルマットの温泉開発を巡る物語である¹⁷。その中で、様々なタイプの医師が、副次的人物であるにもかかわらず、物語の冒頭から最後まで途切れることなく登場するのは注目に値する。

それではまず温泉治療と医師達の間接関係を見てみよう。この小説に最初に登場する人物は、鉱水の発見者であり温泉監督官のボヌフィーユ博士である。モントリオル温泉は、アンデルマットがオリオルじいさんの土地に湧き出た温泉を開発して作り上げたもので、もともとはボヌフィーユ博士がアンヴィルに温泉脈を発見したことから、ボヌフィーユ泉とよばれていた。

この湯治場は他のすべての湯治場が開かれるのと同じようにして開かれた。その元湯に関するボヌフィーユ博士の小冊子が口火だったのである。博士はまず荘重で感傷的な文体でこの土地のアルプス風の景色の魅力をほめちぎることから始めた。[...] それから突如として、何の脈略もなく、ボヌフィーユ泉の治療的特効に入ってしまった。重炭酸塩、ナトリウム、混合性、やや酸性、酸化リチウム含有、鉄分も含む等々、そしてあらゆる病気を治す力があるというわけである。[484]

ボヌフィーユ博士が執筆した小冊子には当時の温泉療養地の冊子の特徴が顕著に表れている。医師の発行する温泉についての冊子は、保養者を確保するために不可欠だったが、それは必ずしも医療について特化されたものではなかった。ボヌフィーユ博士が最初に説明するのは、アンヴィルの町とその周辺の景観の美しさである。ドミニック・ジャレッセが指摘しているように、19 世紀においては、温泉療養地は旅行ガイ

ドの一部として組み込まれ、観光地の案内と深く結びつくことで発展していったのである¹⁸。つまり温泉に療養に来る人々は一般的に裕福な観光客でもあり、観光の付加価値として身体にもよい温泉地を選択していたのだ。源泉を発見し、その源泉にかんする小冊子を出版したボヌフィュー博士は、当時の典型的かつ伝統的な温泉医だと言えるだろう。

だが、そこにパリ生まれのラトヌ博士とオーヴェルニュ人のオノラ博士という二人の温泉医が参入してくる。ボヌフィュー博士は「古いフロックコート」[485]を着て「染みだらけの垢じみたシルクハット」[485]をかぶっているが、ラトヌ博士は「まっすぐ立ち、痩せていてきちんとしており、年齢の見当がつかない。洗練された略服を着ていて、手にはシルクハットを持っている」[487]。フロックコートやシルクハットは当時流行遅れになりつつあるうえに、手入れがされていないことから、ボヌフィュー博士は時代遅れの人物であるだけでなく、外見にはこだわらない頑固な性格であることがわかる。反対にフロックコートを着ずに、シルクハットも手に持つラトヌ博士は近代的な医者を感じ、人目にこだわる浅薄な性質であることが見てとれる。三人目のオノラ博士は「髭をきちんとそった清潔そうな太った男であるが、愛想がよくて人当たり」[485]がよいとだけ述べられ、外見は全く描かれていない。その理由は「二人と友好的な関係を続けていた」[485]という記述からもわかるように、彼が二人の間で媒介的な役割をしていることを強調するためであると考えられる。

次に各医師のクリスティーヌに対する治療法を見てみよう。クリスティーヌの父であるド・ラヴネル侯爵が娘の不妊治療を依頼したボヌフィュー博士は次のようにクリスティーヌを診察する。

ボヌフィュー博士は、アンヴィル温泉が最高の効き目をあらわすであろうと断言し、すぐに処方を書いた。博士の処方というのはいつでも論告文のような恐ろしい様相をおびていた。[…]

博士は長い時間をかけて紙の表にも裏にも書いた。それからまるで死刑の宣告に署名する裁判官のように署名した。[486-487]

彼はクリスティーヌの身体の調子には全く無関心で、処方箋を書き威厳を誇示するだけである。先に述べたように温泉監督医という地位は国家から任命されたという点で権力にも結びついていた。しかし、同時に温泉監督医は一般的にパリから離れた山奥の地方に住み、効果が明白とは言えない鉱泉による治療をほどこすことから、最新の医学的知識を持っているというわけではなく科学的治療が発達した時代に遅れつつあったと言えるだろう。他方、クリスティーヌの夫のアンデルマットに妻の治療を依頼されたラトヌ博士は聴診器を使ってクリスティーヌを診察し、「少しも心配はい

りません。[…] 酸類泉浴を 30 回すればなおる種類のもので。そのほか、毎日正午少し前にコップ半分に水を 3 杯飲めば大丈夫です」[490] と述べ、近代的な医者らしく振舞う。次いで 3 人目のオノラ博士は、仕事もせず恋愛と遊びとで借金を重ねるクリスティーヌの兄のゴントランの紹介によって物語に登場する。オノラ博士は彼女の治療に関心を持たないばかりか、話題をかえて自分の患者であり、地元の裕福な農民であるオリオル老人の小山の爆破の見物に誘う。彼は自分の治療方針を以下のように述べる。「私は患者を薬漬けにするよりは気晴らしをしてあげる方がいいと思っています」。ゴントランが気に入ったのは彼の陰険そうな感じだった」[501]。このように外見だけでなく治療法もボヌフィーユ博士とラトヌ博士は対照的で、オノラ博士は治療に熱心ではないというように、3 人の医師達はそれぞれ非常に異なった人物として最初は描かれているのである。

しかし、その後オリオル老人が爆破した小山から湧き出た温泉の利権を手に入れようとするアンデルマットの行動によって、一見異なったように見えた医師達の新たな姿が暴かれていく。物語の冒頭ではラトヌ博士とボヌフィーユ博士は患者の獲得を巡って対立していたが、オノラ博士は一見金銭への執着があまりないように描かれていた。だが、爆破によって新しく湧き出た鉱泉の場所に最初に到着したのはオノラ博士であり、次にやってきたラトヌ博士は「占領地に最初に入った将軍のように新しい温泉の縁に片足をかけている同僚オノラ博士の姿を見ると、がくぜんとして」[508] 立ちすくむのである。その後も、第 1 部の最終章である第 7 章の前半で、ラトヌ博士はボヌフィーユ博士の患者を奪ったという評判をたてられると困るという理由で、ボヌフィーユ博士はラトヌ博士にも診察を依頼したという理由で、オノラ博士は他の二人の医者気兼ねをするという理由で、各自がクリスティーヌの診察を拒む。それを知った彼女の父である侯爵は「人が死んでしまってもいいというのか…患者がこの温泉場で犬のように死んでも…あの先生方は全く平気なのか！」[566] と叫ぶが、彼の怒りはまさに医師達に共通の欺瞞を言い当てていると言えよう。その欺瞞は同 7 章の後半でさらに明白になる。アンデルマットがオリオル老人を説得して温泉の土地を確保したことがわかると、まずラトヌ博士がアンデルマットに面会を申し出、次にオノラ博士がクリスティーヌに花束を送り、最後にボヌフィーユ博士がアンデルマットに丁寧に挨拶するようになる。つまり彼ら全員が治療は二の次で実は金銭にしか興味が無いということが強調されるのである。

一方、アンデルマットは、この新しい源泉の発見によって金儲けをしようと試み、大規模な開発をするために会社を設立する。事業を拡張しようと意欲的なアンデルマットは、これらの 3 人の医師では役不足だと感じるようになる。彼は新たな温泉保養地の宣伝のために、もっと権威がある医師達を呼び寄せようとするが、そのためにはやはり金銭が必要だということをモンテリオール温泉浴場株式会社の設立のための会

議の場で遠まわしに言う。彼は著名なパリの医師達に土地を贈与し温泉地の別荘を無料で貸し出すことを提案し、「先生方は患者でその代価を払ってくれるということですよ」[585]と周囲を説得する。

「みなさん。近代の大問題は広告ということです。[...] 広告を除いて、救いはありません。[...] 我々は鉱泉を売りたいのです。我々は医者をとおして患者を征服しなければいけません。

皆さん、最も有名な医者も私達と同じ人間なのです。[...] 彼らを買収できると思います。私たちが必要とする有名な医師達は、買収では動かないという評判です。しかし、上手に行えば、私達が手に入れることができない人がいるでしょうか。[584]

自分の目で行われている妻の不倫には全く気付かないが、医師達の金銭欲については完璧に理解しているアンデルマットの提案は、会議ですべて受け入れられ第1部は終了する。医師達は、彼にとってはなによりも保養者を呼び集めるため、つまり金銭を集めるための一番有用な道具なのである。

さて、第2部は第1部から1年の月日がたった時点から始まる。新たにできた温泉街はモントリオール温泉と名付けられ、立派なカジノや巨大な純白のホテルが出現し、1年前と全く異なった様相を呈している¹⁹。しかし、第2部の第1章でも、第1部の第1章と同様に、最初に登場するのは、3人の新しい医師達である。

3人の名医であり有名人、マールセル、クローシュ、レミュゾの諸教授が新温泉の後援者になり、温泉の管理者達からは自由にお使い下さいと提供されたベルン組立別荘会社の別荘にしばらく滞在することを承諾してくれた。

この3人の影響下に、一群の患者がいち早く押し寄せてきた。[592]

医師達はアンデルマットの思惑通り、土地の贈与と無料の宿泊という好条件につられてやってきたのだ。

第2部においては第1部に登場した3人の医師達の間で最も洗練されていたラトヌ博士が、3人の名医と呼ばれている新たな人物たちの登場によって、ボヌフィーユ博士やオノラ博士の立場に置かれてしまう。なぜならモントリオール温泉の奇跡的治療についての小冊子を執筆したのはボヌフィーユ博士ではなくラトヌ博士であり、新しい温泉で注目を集めるのはパリから来た医師達となっているからだ。そればかりか、ラトヌ博士はオノラ博士が治療として行っていた胃洗浄を馬鹿にしていたが、新たな温泉ではその療法を看板に載せて売り物にしようとするのである。

しかし、ボヌフィーユ博士は温泉監督医として、温泉に自分の名前を付けることができたが、ラトヌ博士にはそれができない。以前の 3 人の博士の中でラトヌ博士と最も親しく接してきたにもかかわらず、アンデルマツは利権を得た新たな温泉に彼の名をつけようとしなければかりか、自分が呼んできた 3 人の名医の名前さえつけようとせず、自分の妻のクリスティアーヌ、オリオル爺さんの娘のルイーズとシャルロットの名前をつける。この行為は、アンデルマツが医師達の名声を利用しつつも、モントリオル温泉を治療という目的で開発したのではないことを明白に示していると言えるだろう²⁰。

さて、3 人の新たな名医達は、第 1 部の 3 人と同様にそれぞれ個性を持っている。レミューズ教授は小男で、「櫛であまりといていない黄色の髪の毛をして、仕立ての悪いフロックを着て、垢だらけの薄汚い格好をしている」[600]。彼の服装は、「垢じみたシルクハット」をかぶり、「ゴマ塩の長い髪」で不潔にみえるボヌフィーユ博士に酷似している。またマールセル教授は「顎鬚も口髭もない美男の医者で、にこやかな、身じまいのきちんとした好紳士」[600-601] で、ラトヌ博士に類似している人物である。また、新たな温泉の重役会議の場を先頭で行くのはアンデルマツ、次に重役達、オリオル父子が続くが、そのあとに続くのはアンヴィル医師団である。

しかし、第 2 部で大きな役割を果たすのは、上記の人物達ではない。この場にはボヌフィーユ博士は登場しないが、アンヴィル医師団には「かわりに新しい二人の医師がはいっていた。一人はブラック博士、非常に背の低い。ほとんど小人といってもいい老人で、その極端な信心ぶりは彼の着いた日から土地中の者を驚かした」[601]。もう一人は「非常に美男子の青年で、ひどくおしゃれで、髪もきちんと整えており、小さな帽子をかぶっている。マゼリ博士といい、ラマ侯爵夫妻のお抱えのイタリア人である」[601]。ただしこの二人の医師は治療によって重要な役割を果たすようになるのではない。ブラック博士は、熱心なカトリック信者のマルデブルグ大公妃がローマの枢機卿の推薦で彼を指名したことから、保養者の間で人気のでたのである。

この時から博士は流行児となった。博士の診療を受けることが、よい趣味ということになり、品位があるということになり、大変シックということになった。[...] 女性達が全く信頼することのできるはこの先生だけであると言われた。[616]

ブラック博士が行うのは「女性達の話が終わるまで口をはさまず聞いてやり、彼女達の意見のすべて、質問のすべて、希望のすべてを手帳に書き留める」[616] ことであり、治療法は温泉を飲む分量を毎日増減することだけであった。女性達は、信仰心が強いと思われるブラック医師に診察を依頼することで、自分達自身が信心深いと他者から思われ、イメージが向上するのを期待していたのである。もうひとりのマゼ

リ博士は美貌と気遣いですべての女性達の心を捕える。「この美男のイタリア人の博士の助言を獲得するのに、すべての婦人達の中に全く火の出るような争闘が行われた」[620]。彼の治療法はブラック博士とは反対に、心地よい言葉を積極的に患者にかけ、「マッサージとキュラソ」[619]が最大の薬だと公言することであった。つまり、温泉医の人気は女性達にいかにかにいられるかにかかっていたのである。

このような温泉治療の曖昧さは、オノラ博士とラトヌ博士の態度でも明白となる。オノラ博士は新たに湧き出たモントリオルの鉱泉を「鉱泉の味は私も知っている」[508]と断言し味見しようとしないうし、「いつでも診察をして5分後には、自分が命じた飲用コップの数を忘れる」[617]のである。ラトヌ博士も「温泉がどういう効果があるかさえほとんど我々にはわかっていないのだから、どんな治療の法則によっても規定することのできない服用量の増減を毎日処方するのは全く不可能な話ですよ。こうしたやり方は最も医術を害するものです」[617]とブラック博士を批判し、温泉の医療効果を否定する言葉を投げつける。このように、第2部では医師達の言動から温泉療養の効果が否定的に語られるのである。それでは、彼らがこの物語で果たす本当の役割とは何であろうか。

3. クリスティアーヌと医師達

『モントリオル』に登場するのは、医師達をはじめ、オリエル老人など金銭を第一の目的として行動する人物が大部分である。しかし、ヒロインであるクリスティアーヌは、夫のアンデルマット、父親、兄と彼女を除く家族全員が金銭欲の強い人物で構成されているにもかかわらず、物語の最初から最後まで金銭に関心のない人物として描かれている。それでは、クリスティアーヌが医師達にどのような態度で取ったかを見てみよう。

先にも述べたように、第1部では彼女の不妊治療のために3人の医師が彼女を診察する。その時の彼女は彼らに対して同様の態度で接する。最初のボヌフィーユ博士の診察の時クリスティアーヌは次のように振る舞う。

博士と向き合って腰かけた若い女性は、唇の端を上げて、吹き出したい気持ちをおさえながら、彼を見つめていた。

おおげさなおじぎをして、博士がでていくが早いか、彼女はインクで真っ黒に書かれた紙を取りあげ、それを丸めて、暖炉の中に放り投げた。それから、やっと、心の底から笑いながら、こう言った。

「お父様ったらどこであんな時代遅れな人を見つけたの？ […] 大革命前の医者を持ち出してくるなんて！… ああ！なんておかしいんでしょう」。[487]

ボヌフィュー博士の診断書を彼が出て行くやいなや暖炉に放り込んだことからわかるように、彼女は全く彼の診療を信じておらず、博士は笑いの対象でしかない。

続いてラトヌ博士が治療に訪れたのを見たときは「新しく来た医者の前で笑い出さないために、ハンカチに咳き込むふりを」[488]するし、オノラ博士に出会った時は、クリスティアーヌは「笑い出したいのを」[497]おさえるというように、等しく3人の医師を笑い飛ばし、彼らの忠告を全く聞き入れない。第1部ではこのようにクリスティアーヌは彼らの欺瞞を最初から見抜く人物として描かれているのである。

さて第2部でクリスティアーヌと深い関係を持つのはマゼリ博士とブラック博士である。第2部の医者の中で最も登場回数が多いマゼリ博士は間接的にクリスティアーヌの人生に決定的な影響を及ぼす。クリスティアーヌの兄ゴントランはオリオル姉妹の妹のシャルロットに近付くが、彼が女性に対する意見を聞く相手はマゼリ博士である。マゼリ博士は次のように答える。「一緒に寝るには妹の方ですね。結婚するなら、姉さんの方ですよ」。ゴントランは笑った。「ああ、我々は完全に同意見ですね」[639]。彼は医師というよりも、ゴントランにとっては女性に対する一番信頼がおける忠告者なのだ。そして、このようなマゼリ博士が物語の展開において大きな役割を果たしていく。

ゴントランはその後アンデルマットの入れ知恵によって、より多大な金銭を得るためにシャルロットから姉のルイーズの方へ乗り換える。そして妊娠してしまったクリスティアーヌに興味を失ったポールは、シャルロットに近付くようになる。ポールが女性に引きつけられる時は常に他者がその女性に深く関わっているということに注目したい²¹。クリスティアーヌの場合は結婚して夫がいたし、シャルロットの時はゴントランの興味が自分から姉のルイーズに露骨に移ったことに傷ついているのを見たからである。「女性が彼の魂を動かすたびに彼を捕えるあのがむしやらかな献身的な気持ちにつきあげられて、同情と愛情が身中を揺すぶるのを彼は感じた」[659]。そのようなポールの恋愛感情を刺激し、シャルロットへの結婚を申し込む直接の契機となったのは、マゼリ博士であった。マゼリ博士がシャルロットに近付くを見て、ポールは激しい競争意識を持つ。

シャルロットのそばに博士〔マゼリ〕の姿を見かけるが早いですが、彼〔ポール〕はそばへと寄って行き、もっと直接的な方法で、娘の愛情を得ようと努力した。親しい友人のような、献身的なぶつきらぼうさで愛情を示そうとした。〔…〕この戦いは毎日繰り返され、二人ともますます熱中したが、しかも、両方ともおそらく、はっきり決まった意図などは持ち合わせていなかったのである。二人は同じ獲物を取りあっている二匹の犬のように、全く譲ろうとはしなかった。[669]

マゼリ博士はシャルロットに治療をほどこすためではなく、ただ単に彼女の気をひくためだけに会いに行く。さらにここではポールも彼女に魅力を感じているというわけではないことが明言されている。彼らは男同士で競い合い、勝利感を得るために彼女の気をひこうとしているにすぎないのである。

結局、ポールが嫉妬による激情の末シャルロットと結婚するとオリオル老人に宣言し、結婚契約書を書いた当日、マゼリ博士は以前から噂があったクロシュ教授の娘と駆け落ちする。他の登場人物達は、マゼリ博士がシャルロットに近付いたのは、教授の娘を嫉妬させるためだったのではないかと推測するが、その理由は物語の中では明確に明かされない。換言すれば、マゼリ博士はクリスティアーヌの子供の父であるポールに結婚を決意させる役割を果たすために存在したとも考えられる。それだけでなく、マゼリ博士はモンリオルの医師達の勢力図を書き換える。彼が娘と駆け落ちしたことで、最も権威があったクロシュ教授はモンリオルを去ることになるのだ。

さて、ポールの子供を身ごもったクリスティアーヌは臨月になるにつれ罪悪感にさいなまれ、信仰深いと考えられているブラック医師に診察を依頼したいと夫に頼む。

彼女〔クリスティアーヌ〕は頭の中で、自分に施行される、手術の光景を様々と見るのである。開腹され、血だらけの寝台の上に、仰向けになっている自分の姿が見える。〔…〕おそろしくてたまらない受難の光景を改めてまざまざと見るのである。そこで、彼女はブラック博士だけが、本当のことを言ってくれるであろうと考えた。すぐに呼んでほしいと強く頼んだ。[677]

彼女は夫への裏切りと言う自分が犯した罪によって地獄に落ちるのではないかという恐怖に怯える。そのようなクリスティアーヌにブラック博士は次のような態度を取る。「胎児の位置が悪いのではないかという大きな心配を彼女が述べた時、医者たちは立ち上がり、聖職者のような用心深さで、毛布の上から、手でさわってみた。それからはっきり「いや大変よろしい。」と言った。クリスティアーヌはこの医者を抱きしめなくなった」[679]。ブラック博士は、クリスティアーヌの出産時の心配を払拭するが、特に彼女を診察せずに結論を下す。彼の態度は、あたかも手を触れただけで病気を癒す聖人を模倣しているかのようであり、そこには近代的な医師の姿はない。

クリスティアーヌは彼の判断に喜んだが、それは一瞬のことであった。彼女は、治療にかんして「ブラック博士だけが、本当のことを言ってくれる」であろうと期待した。彼は確かにクリスティアーヌに真実を伝えることになるのだが、それは彼女の思惑とは全く異なったものだった。ブラック医師が彼女に伝えたのは、クリスティアーヌが最も恐れていたこと、ポールとシャルロットの結婚、つまりクリスティアーヌがポールの愛情を決定的に失ったという事実であった。もちろん、ブラック博士は意図

的にそれを話題にしたのではない。診療の後の単なる世間話にすぎなかったのであるが、この偽善的な医者こそがポールの裏切りという真実を伝える役目を果たすのである。

そしてその情報がクリスティアーヌにとって打撃となり彼女は突然出産することになる。彼女の出産時には、夫のアンデルマットがあわてて呼び寄せたマールセル教授、ラトヌ博士、ブラック博士の3人の博士が立ち会うが、彼らはまるでその場面では存在しなかったかのように全く描写されず、出産は医師の助けをかりずに彼女が一人で行ったように描かれる。

しかし医師達は、出産後のクリスティアーヌにも影響を与え続ける。出産した彼女の世話をするのはオノラ博士の年上の妻なのだ。世話好きの田舎女で、もと産婆だったオノラ博士の妻の監視下でポールもゴントランもオルオル爺さんの二人の娘と逢瀬を重ねていた。それゆえにこの愚鈍な妻は、クリスティアーヌに問われるままにポールとシャルロットの結婚までの経過について詳細に答えるのである。クリスティアーヌはオノラ博士の妻の話を聞いて苦痛を感じるが、また同時にポールの浅薄さに気づき、彼を見限り自分自身と夫の子供として娘に愛情を注ぐことを決意する。オノラ博士の妻は、マゼリ博士、ブラック博士の世間話と同様に医療とは無関係に、シャルロットとポールという二人の主要登場人物の恋愛を終了に導いたのであり、換言すればオノラ博士は自分の妻によって、クリスティアーヌの人生を決定する役割を間接的に果たしたとも考えられるだろう。

さて、興味深いのは、第2部の最終章でボヌフィーユ博士が再登場する点である。アンデルマットは出産後まだベッドにいるクリスティアーヌに次のように言う。

「[…] おまえが承知してくれるととても嬉しいんだが。ボヌフィーユ博士の往診だよ！」するとはじめて彼女は笑った。魂までは達せず、唇の上に残る、青白い笑いだった。こう聞いた。

「ボヌフィーユ博士ですって？奇跡ね！では、仲直りなすったの？」

「じつはそうだよ。[…] もと温泉浴場を買収したんだ。[…] かわいそうなボヌフィーユ先生は誰よりも先にこれを知ったのさ。むろんのことだね。するとなかなかずるいやつさ。毎日、お前の容体を聞きに来て、同情の言葉を書いた名刺をおいていく。[…]」。

「じゃ、いつでもいい時に来て下さればいいわ」とクリスティアーヌは言った。「あの先生にお会いするのは嬉しいわ」。[693]

この場面は、第1部第1章とは対照的になっている。まず、第1章ではボヌフィーユ博士は彼女の不妊を治療したが、最終章では出産後の往診を申し出る。彼は新しい

医者達の到着とともに隠遁状態に入っていたが、子供を産んだクリスティーヌに再び積極的に接するのである。さらにクリスティーヌが不妊治療の時に望んでいた子供は夫との子供であったが、最終章では愛人との子供を授かっている。最後に、第1章では彼女はボヌフィーユ博士のことを馬鹿にして心のそこから陽気に笑うが、最終章では表面的に微笑むだけである。このようにすべてが反転している状況にもかかわらず、クリスティーヌが物語の最初と最後に受け入れるのがボヌフィーユ博士であることから、物語がひとつの円環を閉じて終わっているという印象が生まれる。そのことにより、ボヌフィーユ博士の存在は、クリスティーヌの心情の変化を一層明確に示唆していると考えられる。ここで、ボヌフィーユ医師をクリスティーヌに最初に紹介したのは貴族である父親であり、彼女はボヌフィーユ医師を「大革命以前の医者」と評したことを想起こそう。彼女が近代的な医師達を拒絶しボヌフィーユ医師を魂まで届かない頬笑みを浮かべながら「あの先生にお会いするのは嬉しいわ」と受け入れるのは、愛人との情熱的であった19世紀的恋愛を捨てて、アンデルマットの安定した生活に立ち戻る決意、換言すれば理性的な人生を選択した証明でもありとも考えられるだろう。

4. おわりに

結局、この物語において医者達は反復される存在となっている。まず、第1部ではボヌフィーユ博士、ラトヌ博士、オノラ博士がクリスティーヌの診察を行う。その後三人は同時にクリスティーヌの治療を拒絶するが、アンデルマットの温泉開発が確定すると、同三人が次々とクリスティーヌの治療を申しでる。外見やその治療法では異なっていた医師達の姿は、反復するうちに融合され、金銭への固執によっていっそう均一化されていくのである。しかし、物語が進むにつれ、マゼリ博士やブラック博士のように、反復から逸脱した医師達は、医療と関係なくクリスティーヌの運命に深く関わっていき、独自の存在へと変貌する。モーパッサンは『病人と医者』の中で、「毎日ホテルの部屋で病人と医師の間ではモリエールもすべてを言いつくせなかった崇高なコメディが演じられている」²²と書いている。『モントリオール』では、最初医師達は温泉保養地の典型的かつ二義的な存在として描かれながらも、その反復によって物語に統一感を与え、最終的に主人公の女性に「人生の最後まで強く生きていく」[699]という決意を抱かせることに大きな役割を果たすほどの、「崇高なコメディ」の登場人物達へと変貌していったと考えられないだろうか。

註

- 1 Guy de Maupassant, *Romans*, édition établie par Louis Forestier, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1987。『モントリオル』は最初 1886 年 12 月 23 日と 1887 年 2 月 6 日に『ジル・ブラス』紙に掲載された。プレイアッド版『小説集』からの引用は [] 内に出所の頁数を示す。なお訳出にあたっては、杉捷夫訳『モントリオル（上）（下）』、岩波書店、2005 年を参照した。
- 2 Voir Christoph Oberle, « Lettres inédites de Maupassant à la Comtesse Potocka », *Revue d'histoire littéraire de la France*, vol. 101, P.U.F., 2001, pp. 1275-1286. モーパッサンはシャテルギュイヨンやエクス・レ・バンなどの温泉地からポトカ伯爵夫人に手紙を出し、そこでの生活を語っている。
- 3 Guy de Maupassant, *Correspondance II, 1881-1887 (lettres N^{os} 200 à 476)*, édition établie par Jacques Suffel, iconographie réunie par Michel Carrière, Edito-Service S. A., Genève, 1973, p. 191. Lettre à sa mère, samedi août 1885. モーパッサンはアンリ・アミックにもオーベルニュ地方を賞賛し「ここは本当にすばらしく、特別な印象を与える地方だ。僕が書き始めた小説の中にそれを書くつもりだ」と書簡で述べている(voir *ibid.*, p. 192. Lettre à Henri Amic, le 17 août 1885)。
- 4 モーパッサンは 1886 年の 10 月にスタシュルウィッチへも *Messenger d'Europe* に『モントリオル』の第 1 部を 1886 年の 12 月 15 日に、第 2 部を翌年の 1 月 15 日に掲載してくれるように提案している(voir *ibid.*, p. 222. Lettre à Stassulewitch, octobre)。
- 5 Adolphe Laurent Joanne et A. Le Pilier, *Les bains d'Europe : guide descriptif et médical des eaux d'Allemagne, d'Angleterre, de Belgique, d'Espagne, de France, d'Italie et de Suisse. Ouvrage entièrement nouveau contenant une carte des bains d'Europe*, Louis Hachette et cie, 1860. アドルフ・ジョアンヌは、1860 年頃から鉄道文庫の一部としてルイ・アシェットから出版された旅行ガイドブック『ジョアンヌ ガイド』の監督を行った。その中で、温泉療養地に限定されたガイドブック『ヨーロッパの温泉』が出版され人気となった。
- 6 Dominique Jarrassé, *Les thermes romantiques : bains et villégiatures en France de 1800 à 1850*, Publications de l'Institut d'Études du Massif Central (Centre d'Histoire des Entreprises et des Communautés), coll. « Thermalisme et Civilisations ». FASCIULE II, 1992, pp. 148-149. ジャラッセは 19 世紀の温泉と病院の関係について分析している。
- 7 Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles*, Tome II (les contes et nouvelles publiés entre avril 1884 et 1893, contes posthumes), notices, notes, variantes et bibliographie par Louis Forestier, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1979.
- 8 *Ibid.*, p. 101.
- 9 *Idem.*
- 10 Philippe Langenieux-Villard, *Les Stations thermales en France*, Presses universitaires de France, coll. « Que sais-je ? », n° 229, Paris, 1990, p. 16. なお訳出にあたっては、成沢広幸訳『フランスの温泉リゾート』、岩波書店、2005 年を参照した。
- 11 セヴィニエ侯爵夫人は、リューマチの治療のため 1676 年にヴィシーに 1678 年にブルボン・ラシャルボンに滞在した (voir Madame de Sévigné, *Correspondances*, tome II, juillet 1675 – septembre 1680, texte établi, présenté et annoté par Jacqueline Duchêne, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », pp. 301-303, 307, 307 et 312-315)。

- 12 Philippe Langenieux-Villard, *Les Stations thermales en France*, op. cit., p. 29. 成沢広幸「フランス温泉療養リゾート沿革」、『経済学論集』第9巻第1号、2000年参照。山田登世子『リゾート世紀末』筑摩書房、1998年参照。
- 13 パラドック博士は鉱泉の検査官であり、モーパッサン家の古くからの友人でもあった。モーパッサンはこの博士を非常に信頼しており、マラルメにも紹介し、マラルメもその医者に感謝の書状を送っている。
- 14 Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles*, Tome II, op. cit..
- 15 *Ibid.*, p. 533.
- 16 Guy de Maupassant, *Correspondance II*, op. cit., p. 191. Lettre à sa mère, samedi août 1885.
- 17 成沢広幸「モーパッサン『モントリオール』を読む 世紀末温泉開発ブーム」、『宮崎産業経営大学研究紀要』第13巻第1号 2000年、pp. 41-61 参照。成沢氏は『モントリオール』における恋愛と温泉開発の関係について分析している。
- 18 Dominique Jarrassé, *Les thermes romantiques*, op. cit., 1992, p. 262.
- 19 クルティエは『水と温泉の文化史』の中で19世紀のフランスの温泉保養地の状況を次のように書いている。「貴族や富裕階級の人々は、湯治のためなら喜んで金を払う。鋭い事業家たちがこの機会を見逃すはずはなかった。優良な源泉のまわりには、特権階級の好みに合わせた絢爛豪華な施設が次々とつくられていった」(voir Alvec Lytle Croutier, *Taking the waters : spirit, art, sensuality*, Abbeville Press, New york, London, Paris, 1992, p. 112)。なお訳出にあたっては、武者圭子訳『水と温泉の文化史』、三省堂、1996年を参照した。
- 20 開発者にとって最も重要なことは温泉保養地に高級リゾートのイメージを与え多くの裕福な客を呼び込むことであった。それゆえに社交場としてコンサートや演劇などの娯楽やカジノの建設が重要だと考えられていた (voir Vladimír Křížek, *Kulturgeschichte des Heilbades*, Edition Leipzig, 1990, pp. 183-184)。なお訳出にあたっては、種村季弘、高木万里子訳『世界温泉文化史』、国分社、1994年を参照した。それゆえにアンデルマットは、医師の名前よりも社交をイメージさせる女性の名前を保養地に付けることにこだわったと考えられる
- 21 シャルロットへの恋愛感情はクリスティーヌとも関係してくる。「人間の心の不思議な現象というべきであるが、クリスティーヌの口にのぼるシャルロット礼賛の言葉は、彼にとっては非常に価値を帯び、彼の恋心を刺激し、欲望に鞭打ち。抗いがたい魅力でこの娘を包んだ」[667]。ポールは自分の子供を妊娠したクリスティーヌから気持ちが離れていったように見えるが、クリスティーヌの言葉によってシャルロットへの愛情が育まれるということから、やはりクリスティーヌの影響下にあることがわかる。
- 22 Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles*, op. cit., p. 102.